＜ミニ・シンポジウム＞

資本と都市
ー企業都市史における偶然と必然ー

野口義直

【書評】山縣宏之『ハイテク産業都市シアトルの軌跡』ミネルヴァ書房、2010 年

はじめに
・自己紹介：環境エネルギー産業論。企業都市論については門外漢。アメリカ経済論。
・山縣君とは学生時代以来の先輩後輩関係。単著のお祝いとして簡単なコメントを。

本書の総括
・シアトルを対象とする企業都市史
・アメリカの産業構造の転換と都市の関係についての研究
・ボーイングからマイクロソフトへ、航空宇宙産業からソフトウェア産業へ。航空宇宙産業都市からソフトウェア産業都市へ。
・この転換には、相対的に必然性がある。ボーイング社がシアトルに集積していた、IT 技術者の存在。知的労働者が都市に蓄積されていたこと。これがマイクロソフトを始めとするソフトウェア産業の集積の条件となった。

論点
(1) 企業都市史における偶然と必然について
・アメリカにおけるソフトウェア産業の集積地として見れば、やはりシリコンバレーが典型で、シアトルは特殊であろう。
・たまたまビル・ゲイツの故郷であり、マイクロソフトが成長したから、それなりにソフトウェア産業都市として成長したのであって、その逆ではない。だから、シアトルがそれなりのソフトウェア産業都市に転換できたのは偶然ではないか。もし必然性を説明するのなら、マイクロソフトが業界内の競争で成功を収め、巨大企業に成長する条件もシアトルの内にあったと証明する必要がある。
・偶然は偶然であると認めた方がリアルな歴史叙述になると思う。
・そのうえで(シリコンバレーではなく)シアトルを扱う意味は何か。本書の提起している到達は何か。ここがもうひとつ明確でないのが本書の弱点、筆者も苦しんだのではないかと思う。

(2) 資本と都市の関係についての方法的整理
1.　資本にとって都市は外的条件
さしあたって資本にとって都市は所与であり、外的条件である。
都市は、労働者の生活空間であり、その再生産のための社会的共同生活手段を有する。
都市は、資本の活動空間であり、その蓄積運動のための社会的共同生産手段を有する。
都市の備えるインフラストラクチャには労働者の共同生活手段と資本の共同生産手段の二種類があるわけだが、同じひとつのインフラが、その利用形態によって生活手段ともなれば生産手段となる。例えば、電線網、水道、道路、電話網、etc.　これが都市内における公害・環境問題の一つの発生根拠となる(宮本憲一)。」

2.　都市における労働者の蓄積

資本がある都市を拠点として選択する場合、十分な社会的共同生産手段の蓄積と十分な労働者の存在、この二つは本質的な必要条件となるだろう(もちろんこの二つで十分条件ではない)。

労働者の蓄積という面から見れば、具体的有用労働について、すなわち具体的な技能の蓄積について考慮される。特にソフトウェア産業のような複雑な知的労働者の蓄積が求められる産業にとっては。対照的に、PC 組み立て工場のように、単純労働に従事する安価な工場労働者が必要だとなれば、途上国に立地する。

3.　自らの前提条件をつくりだす主体としての資本、資本によって規定された資本主義的都市

さて資本は、ある都市を拠点として選択すると、自らの存在の前提条件を自らつくり出し始める。主体としての資本。つまり、都市自治体に働きかけて社会的共同生産手段を準備させ、また必要な労働力を引き寄せ、都市に生活させる。この労働者のための社会的共同生活手段をも、都市自治体に整備させる。また、知的労働者の再生産のために、その訓練教育機関(大学)を整備させる。

総括すると、都市は資本にとって前提であるが、資本はこの前提をつくり出す。都市は、資本にとって単なる外的条件ではなくなり、資本によってつくられた内的条件となる。これは資本主義的都市である。

4.　資本主義的都市シアトル

シアトルを資本主義的都市に転化させたのはボーイングであり、ボーイングが準備した諸条件を活用したのがマイクロソフトである、と言ってよいだろう。そしてマイクロソフトも、資本主義の諸条件を自らつくり出す主体である。

マイクロソフトのような巨大 IT 企業が、必ずシアトルから育つという必然性(絶対的必然性)があった、とはいえないが(シリコンバレーなら言いうるかもしれない)、シアトルにはマイクロソフトが成長する諸条件、実在的可能性(相対的必然性)は存在していたと言いうるだろう。

（摂南大学経済学部）